

## 何を今さらSDGs?

むら せ まさ ひこ  
村 瀬 勝 彦\*

### 1. はじめに

持続可能な開発目標 (SDGs) といえば設定して5年になる。筆者は昨年6月まで特に水・防災分野を中心にSDGs達成に向けた取り組みを促進する部署に勤務していた。SDGs作成から5年、筆者が帰国してから1年半が経過して何を今さらSDGsといった感じもしないではないが、目標年2030年まで「まだ」10年あるので改めて説明することをご容赦いただきたい。

### 2. SDGsとは

SDGsは持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals) の略で複数形、17のゴールを指す(図-1)。2015年9月に開催された国連持続可能な開発サミットにおいて「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択され、2030年までに達成を目指して掲げられた17ゴール169ターゲットである。その前進である2015年を目標として2001年に策定されたミレニアム開発目標 (MDGs) の積み残しに新たな課題を加えて策定された。MDGsが主に途上国の開発に主眼が置かれていたのに対し、SDGsは環境や平和、協調など先進国も含めた全世界の課題を対象としている点にその特徴がある。



図-1 SDGs17ゴール<sup>1)</sup>

### 3. SDGsの達成に向けて

前述のように2030アジェンダは各国の首脳級が集まるサミットで採択された決議に基づくもので、いわば各国がこれからその達成に向かうことを約束したものである。

#### 1) ハイレベル政治フォーラム

2015年9月の決議には同アジェンダの実施をレビューする世界レベルのフォローアップ・プロセスとして国連ハイレベル政治フォーラム (HLPF) が位置づけられ、4年に1回首脳級が参加する国連総会主催の会合と毎年閣僚級が集まる経済社会理事会主催の会合がある。国連総会や経済社会理事会は国連加盟国で構成され、その活動を国連事務局が支えている。

#### 2) 国連事務局

国連事務局はSDGs達成に必要なHLPFなどの会議の準備や、国同士、あるいは国以外を含めた幅広い関係者の情報交換をサポートする他、データによるモニタリングを行っている。この事務局は例えば保健・健康に関わるものはWHOが、食糧農業に関わることはFAO、教育科学に関わることはUNESCOといった具合に、専門性が明らかなものは専門機関等がその分野をリードする。ただSDGs達成に向けた活動が縦割りになることを避けるため「SDG〇(番号)は××機関担当」と明記することは避けられている。

国連システムを図-2に示す。筆者が所属していた経済社会局 (DESA) はニューヨークの国連本部にある事務局の一部で、経済社会全般を担当しており、HLPFの開催を事務局としてサポートする他、専門機関等がリードしない部分をリードする、あるいは専門機関等がリードしていても他機関との総合調整が必要な場合その対応を行っている。またSDGsモニタリングの基礎となる統計部門 (国連統計委員会の事務局) を有し、SDGs17ゴール169ター

\* 国土交通省 水管理・国土保全局 河川計画課 国際室長 03-5253-8111 (代)  
(元国際連合本部 経済社会局 首席管理プログラム分析官 2016年7月~2019年6月)

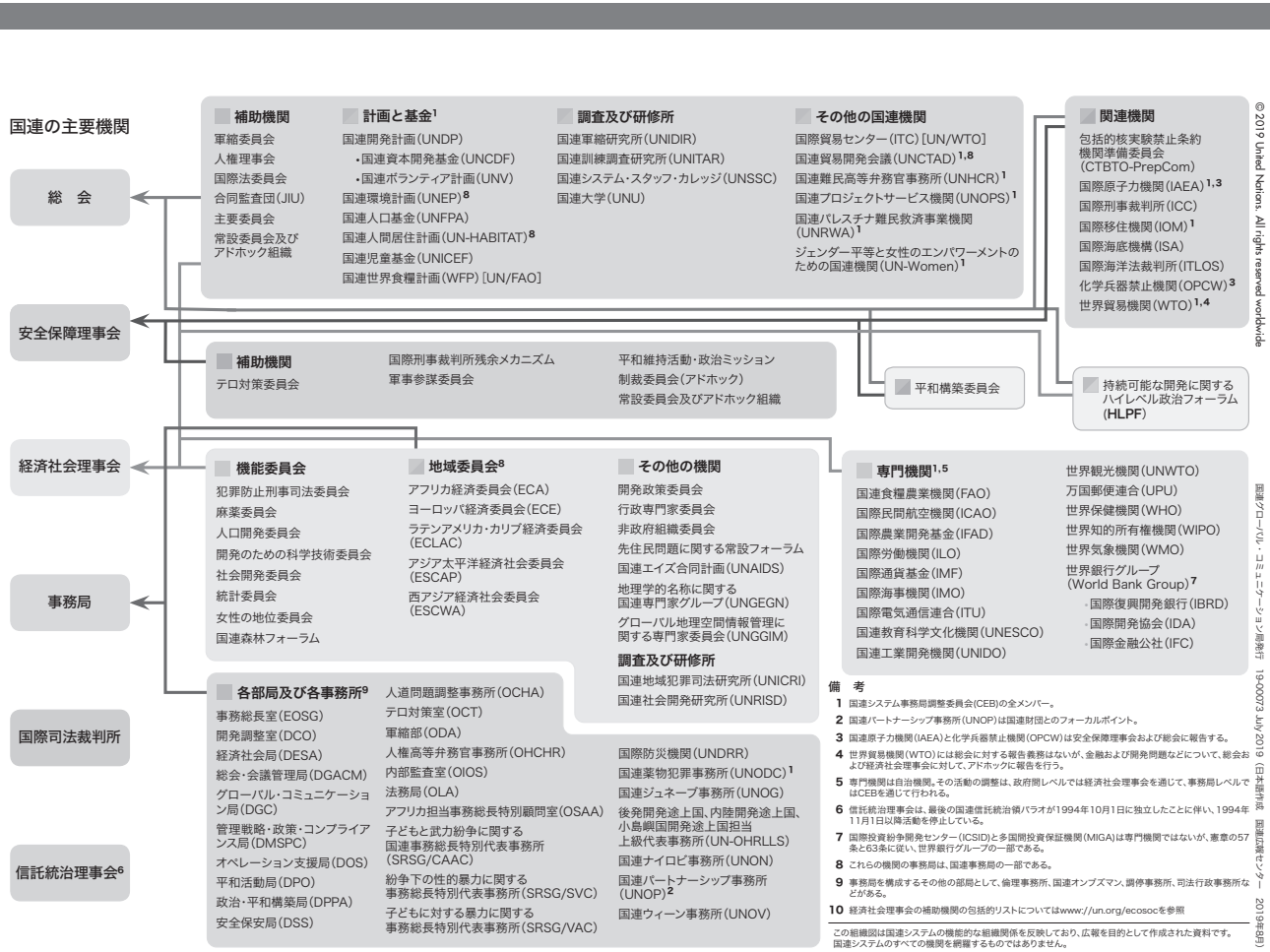


図-2 国連システム<sup>1)</sup>

ゲットのモニタリングのために示された232の指標について定期的に専門家が集まってその改良等について検討も行っている。その意味では幅広い専門家がいますが、個別専門分野を見ると数人しかいない広く薄い組織である。筆者はここで水と災害の専門家として3年間勤務した。

4. SDGsの中の水と防災

専門分野の話になってしまっていて恐縮だが、筆者が担当していた水と防災を中心に触れてみたい。国連システムがどのように機能しているか知る上で参考にはなるかもしれない。

水については、MDGsにもその目標が掲げられ、安全な飲料水と基本的な衛生施設（トイレなど）に持続的にアクセスできない人の割合を1990年から2015年までに半減させるとなっており、飲料水の方は達成できたものの、衛生施設の方は未達成であった。これを受けてSDGsでは水と衛生に関する目標は、環境や統合水資源管理等を併せてゴール6

(SDG6) として掲げられることになった。

防災についてはSDGsでも独立したゴールではなく、いくつかのゴールの中にターゲットとして掲げられている。なお防災に関しては2015年に決議された仙台防災枠組みがあり、2年ごとにグローバル・プラットフォームが開催されている。

水と防災に関係するSDGsを示すと図-3のようになる。国連システムが水と防災についてどのようになっているか目を向けてみると、防災の方は1999年に設立された国連国際防災戦略事務局（UNISDR、2019年より国連防災機関UNDRRに名称変更）が事務局となっている一方で、水の方は総合的に扱う国連機関はないため、水分野を扱う機関が集まるUN-Water（国連水関連機関調整委員会）を2003年に組織している。

UN-Waterには本稿執筆時点で国連32機関が参加しており、その会議や部会等を開いたり、レポートをとりまとめる事務局がスイス、スウェーデン、ドイツ、オランダ、英国、フランス、イタリア、ピ

<p><b>Goal 1: あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる</b></p> <p>•Target 1.5: 2030 年までに、貧困層や脆弱な状況にある人々の強靱性(レジリエンス)を構築し、気候変動に関連する極端な気象現象やその他の経済、社会、環境的ショックや災害に対する暴露や脆弱性を軽減する</p>
<p><b>Goal 6: すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する</b></p> <p>•Target 6.1: 2030 年までに、すべての人々の、安全で安価な飲料水の普遍的かつ平等なアクセスを達成する</p> <p>•Target 6.2: 2030 年までに、すべての人々の、適切かつ平等な下水処理・衛生施設へのアクセスを達成し、野外での排泄をなくす。女性及び女子、ならびに脆弱な立場にある人々のニーズに特に注意を向ける</p> <p>•Target 6.3: 2030 年までに、汚染の減少、投棄廃絶と有害な化学物質や物質の放出の最小化、未処理の排水の割合半減及び再生利用と、安全な再利用を世界的規模で大幅に増加させることにより、水質を改善する</p> <p>•Target 6.4: 2030 年までに、全セクターにおいて水の利用効率を大幅に改善し、淡水の持続可能な採取及び供給を確保し水不足に対処するとともに、水不足に悩む人々の数を大幅に減少させる</p> <p>•Target 6.5: 2030 年までに、国境を越えた適切な協力を含む、あらゆるレベルでの統合水資源管理を実施する</p> <p>•Target 6.6: 2020 年までに、山地、森林、湿地、河川、帯水層、湖沼などの水に関連する生態系の保護・回復を行う</p>
<p><b>Goal 11: 包摂的で安全かつ強靱(レジリエント)で持続可能な都市及び人間居住を実現する</b></p> <p>•Target 11.5: 2030 年までに、貧困層及び脆弱な立場にある人々の保護に焦点をあてながら、水関連災害などの災害による死者や被災者数を大幅に削減し、世界の国内総生産比で直接的経済損失を大幅に減らす</p>
<p><b>Goal 13: 気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる</b></p> <p>•Target 13.1 すべての国々において、気候関連災害や自然災害に対する強靱性(レジリエンス)及び適応の能力を強化する</p>

図-3 水と防災に関連するゴールとターゲット

ル&メリンダ・ゲーツ財団の任意拠出金でジュネーブに設置されている<sup>2)</sup>。いわば国連各事務局の事務局ともいえる、国連32機関が各分野で加盟国が集める場を既に擁しているため、UN-Water自体が加盟国が等を集める公式の場はない。例えばFAOが食糧農業分野で、WHOが健康保健分野でといった具合に各機関が個別の専門分野で加盟国等が集まる場を設け、その専門分野の一部として水がそれぞれ議論されている状況にある。

今年2020年のHLPFは、SDGsの目標年まで10年となり、2020年1月にはSDGs達成のための「行動の10年」がスタートした。水分野ではそれより一歩前、2018~2028年を水の行動10年として活動を開始し(写真-1)、さらにこの10年の節目に当たる2023年に国連会議を、その2年前の2021年にハイレベル会議を開くことを2018年12月に決議している。その調整に事務局職員の立場で筆者は関わって、日本の各省庁による法案調整とは少し変わった、それでいてどこか似ている協議・交渉で各国の思惑のぶつかる場面、合意を探る調整も目の当

写真-1 水の行動10年開始(国連事務総長挨拶の一コマ)<sup>3)</sup>

たりにした。2023年の国連会議は専門機関等による個別の場ではない政府間会合として水の会議が開かれるわけであり、1977年のマル・デル・プラタ以来、実に46年ぶりになる。

## 5. おわりに

国連事務局幹部、国連事務総長(SG)や副事務総長が水について語る、会議に出席する、要人に会う、という場合、経済社会全般のとりまとめを行っているDESAが必要に応じてUN-Waterや専門機関に相談してメモを作成する。DESA局長自身がSGの代理になることも多く、その場合のメモも含めると結構な量になり、筆者が国連事務局にいた3年間、数人で発言メモや原稿を作り続けていた。事務総長が行う演説や事務総長と大統領とのバイ会談に立ち会って議事メモ作成まで経験できたのは今となっては良い思い出である。

SDGsは全世界を対象とした課題であり、まさに今の我々が向き合うことを想定したものである。インフラ整備を考えても、整備されたインフラが果たす機能一つ一つが何らかの形でSDGsに関係していることがわかる。その意味ではSDGsをISO 14000シリーズのようなマネジメントシステムの一部として指標のように活用し、PDCAに生かしていくことも考えられるだろう。民間や芸能界まで含め、SDGsへの参画が広がっており、この10年まだまだSDGsを目にすることは多そうである。

水分野に目を向けると、半世紀ぶりに開かれる水に関する2023年国連会議は2030年までの達成だけでなく、SDGs後にもつながる重要なものになると考えられる。2030年よりさらに先の話であるが、SDGsを活用するだけでなく、次期SDGs?策定にも関わっていく中長期的な展望を持ちつつ、国連を離れた立場からSDGsを眺めていきたいと考えている。

1) 国連広報センター <https://www.unic.or.jp/>

図-1、2については国連から使用許可済み

2) UN-Water <https://www.unwater.org/>

3) 写真は筆者撮影。挨拶全文は以下で参照可能。

<https://www.un.org/sg/en/content/sg/speeches/2018-03-22/decade-action-water-sustainable-development-remarks>